

エウカリスチア — ミサを生きる —

小田武彦

1. 導入

エウカリスチアとは、「最後の晩餐におけるイエスの行為に基づいた聖なる食事」¹、「イエス自身との一致によって、御子キリストの死と復活を通して、聖霊において、父なる神が人を神のいのちと愛に参与させる救いの出来事」²のこと。第2バチカン公会議はエウカリスチアを「キリスト教生活全体の泉であり頂点である」³と定義している。

2. エウカリスチア：「感謝の祭儀」「感謝の祈り（奉献文）」「聖体」

ギリシア語 εὐχαριστία（エウカリスチア）を直訳すると「感謝」。

キリスト教会にとってエウカリスチアとは、イエスの言葉と行い及びイエスの死と復活を思い起こし、心に刻み、記念し、イエスと一つに結ばれ、イエスによって生かされていることを体験する「秘跡」。伝統的に「主の晩餐」、「パンを裂くこと」、「集い（シュナクシス）」、「聖なるいけにえ」、「賛美のいけにえ」、「霊的いけにえ」、「清い聖なるささげもの」、「神聖なる典礼」、「聖なる神秘の祝祭」、「いと聖なる秘跡」、「コムニオ（交わり）」、「天からのパン」、「不死の妙薬」、「旅路の糧」そして「ミサ聖祭」と呼ばれてきた。ラテン語では *eucharistia*、イタリア語では *eucaristia*、スペイン語では *eucaristía*、ドイツ語では *eucharistie*、フランス語では *eucharistie*、英語では *eucharist* と、日本でも16世紀頃は「エウカリスチア」と表記されていた⁴。しかし現在は、「感謝の祭儀」「感謝の祈り（奉献文）」「聖体」という三つの言葉に訳し分けられている⁵。

教皇ヨハネ・パウロ二世回勅 *Ecclesia de Eucharistia* 『教会にいのちを与える聖体』⁶：第一項「教会が聖体（エウカリスチア）に生かされたものであるということ」、第二項「イエスご自身が最初の感謝の祭儀（エウカリスチア）を行ったとされる高間（二階の広間）で感謝の祭儀を行うことができました」。

3. エウカリスチア：イエスの「最後の晩餐」の記念⁷

¹ J. F. ホワイト『キリスト教の礼拝』（日本基督教団出版局、2000年）p.323。

² P.ネメシエギ「エウカリスチア」新カトリック大事典編纂委員会『新カトリック大事典』（平凡社、1996年）第1巻 p.749。

³ 第2バチカン公会議『教会憲章』11。礼部聖省『聖体祭儀指針』6参照。

⁴ *eucaristía* 項、桑名一博ほか『西和中辞典』（小学館、1990年）参照。

⁵ トリエント公会議は七つの秘跡の中の一つの名称としてエウカリスチアを用いているが、その内容はパンとぶどう酒の形態のもとにおけるキリストの現存に限られていた。*corpus sacrum* の訳語が「聖体」ではあるが、エウカリスチアを *corpus sacrum* と同義語のように受け止めたトリエント公会議の影響下で、エウカリスチアもほとんどの場合「聖体」と訳されてきた。エウカリスチアを「感謝の祭儀」や「感謝の祈り（奉献文）」と訳すようになったのは、古代教会におけるエウカリスチア理解を再認識した第2バチカン公会議以降のようである。E.ラゲ『聖體の犠牲』（天使院、第3版、1931年）および土屋吉正『典礼の刷新』（オリエンズ宗教研究所、第3刷、1996年）p.308参照。

⁶ 教皇ヨハネ・パウロ二世回勅『教会にいのちを与える聖体』（カトリック中央協議会、2003年）。

⁷ 3項は、2005年8月30日に神戸市立神戸セミナーハウスで行われた大阪教区宣教司牧者研修

コリントの信徒への手紙 一 11章 23-26節：わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。

ルカによる福音書 22章 15-34節：イエスは言われた。「苦しみを受ける前に、あなたがたと共にこの過越の食事をしたいと、わたしは切に願っていた。言うておくが、神の国で過越が成し遂げられるまで、わたしは決してこの過越の食事をとることはない。」そして、イエスは杯を取り上げ、感謝の祈りを唱えてから言われた。「これを取り、互いに回して飲みなさい。言うておくが、神の国が来るまで、わたしは今後ぶどうの実から作ったものを飲むことは決してあるまい。」それから、イエスはパンを取り、感謝の祈りを唱えて、それを裂き、使徒たちに与えて言われた。「これは、あなたがたのために与えられるわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい。」食事を終えてから、杯も同じようにして言われた。「この杯は、あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約である。しかし、見よ、わたしを裏切る者が、わたしと一緒に手を食卓に置いている。人の子は、定められたとおりに去って行く。だが、人の子を裏切るその者は不幸だ。」そこで使徒たちは、自分たちのうち、いったいだれが、そんなことをしようとしているのかと互いに議論をし始めた。また、使徒たちの間に、自分たちのうちでだれがいちばん偉いだろうか、という議論も起こった。そこで、イエスは言われた。「異邦人の間では、王が民を支配し、民の上に権力を振るう者が守護者と呼ばれている。しかし、あなたがたはそれではいけない。あなたがたの中でいちばん偉い人は、いちばん若い者ようになり、上に立つ人は、仕える者ようになりなさい。(略)「シモン、シモン、サタンはあなたがたを、小麦のようにふるいにかけることを神に願って聞き入れられた。しかし、わたしはあなたのために、信仰が無くならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちをカづけてやりなさい。」するとシモンは、「主よ、御一緒になら、牢に入っても死んでもよいと覚悟しております」と言った。イエスは言われた。「ペトロ、言うておくが、あなたは今日、鶏が鳴くまでに、三度わたしを知らないと言うだろう。」

① 別れの晩餐

「引き渡される夜」：π α ρ ε δ ι δ ο τ ο → 「彼が裏切られた夜」。

ヨハネ福音書 13章「過越祭の前のことである。イエスは、この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた」→決死の覚悟による愛。イエスにとって、弟子たちにとって、人類にとって重要な食事。神の国成就への信頼と確信。

イエスの展望：過去「神と人との交わりの歴史、イスラエルと神の歴史」。現在「自己の運命、闇の力、この時にかけるイエスの意図」。未来「自分の十字架、世の終わりに至る人類の歴史、この食事の意義」。

会における「ミサと聖体の秘跡—キリストの形見」というテーマの岩島忠彦師講話を要約筆記したものをふくらませたものである。

「わたしの体」、「この死は、あなたがたのためのもの」、イエスの形見、神の愛のあかし。

「この杯」、「あなたがたのために流される、わたしの血による新しい契約」、キリストの血による新しい契約、(神と人類との間の) 契約。

②主の晩餐の意義

「わたしの記念として・・・」。「わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました」(ローマの信徒への手紙 5:8)。十字架は徹底した愛による自己犠牲、奉獻。交わりと一致の秘跡：キリストとの交わり、教会の交わり。

4. エウカリスチア：パウロの理解⁸

コリントの信徒への手紙 一 10章1-22節：兄弟たち、次のことはぜひ知っておいてほしい。わたしたちの先祖は皆、雲の下におり、皆、海を通り抜け、皆、雲の中、海の中で、モーセに属するものとなる洗礼を授けられ、皆、同じ霊的な食物を食べ、皆が同じ霊的な飲み物を飲みました。彼らが飲んだのは、自分たちに離れずについて来た霊的な岩からでしたが、この岩こそキリストだったので。しかし、彼らの大部分は神の御心に適わず、荒野で滅ぼされてしまいました。これらの出来事は、わたしたちを戒める前例として起こったのです。彼らが悪をむさぼったように、わたしたちが悪をむさぼることのないために。彼らの中のある者がしたように、偶像を礼拝してはいけない。「民は座って飲み食いし、立って踊り狂った」と書いてあります。彼らの中のある者がしたように、みだらなことをしないようにしましょう。みだらなことをした者は、一日で二万三千人倒れて死にました。また、彼らの中のある者がしたように、キリストを試みないようにしよう。試みた者は、蛇にかまれて滅びました。彼らの中には不平を言う者がいたが、あなたがたはそのように不平を言うてはいけない。不平を言った者は、滅ぼす者に滅ぼされました。これらのことは前例として彼らに起こったのです。それが書き伝えられているのは、時の終わりに直面しているわたしたちに警告するためなのです。だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。あなたがたを襲った試練で、人間として耐えられないようなものはなかったはずです。神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはなさらず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えていてくださいます。わたしの愛する人たち、こういうわけですから、偶像礼拝を避けなさい。わたしはあなたがたを分別ある者と考えて話します。わたしの言うことを自分で判断しなさい。わたしたちが神を賛美する賛美の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちが裂くパンは、キリストの体にあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは大勢でも一つの体です。皆が一つのパンを分けて食べるからです。肉によるイスラエルの人々のことを考えてみなさい。供え物を食べる人は、それが供えてあった祭壇とかかわる者になるのではありませんか。わたしは何を言おうとしているのか。偶像に供えられた肉が何か意味を持つということでしょうか。それとも、偶像が何か意味を持つということでしょうか。いや、わたしが言おうとしているのは、偶像に献げる供え物は、神ではなく悪霊に献げている、という点なのです。わたしは、あなたがたに悪霊の仲間になってほしくありません。主の杯と悪霊の杯の両方を飲むことはできないし、主の食卓と悪霊の食卓の両方に着

⁸ 4項と5項は、P.ネメシエギ「エウカリスチア」『新カトリック大事典』I pp.742-743を引用し、適宜加筆したり、省略したものである。

くことはできません。それとも、主にねたみを起こさせるつもりなのですか。わたしたちは、主より強い者でしょうか。

コリントの信徒への手紙 一 11章 17-27節：次のことを指示するにあたって、わたしはあなたがたをほめるわけにはいきません。あなたがたの集まりが、良い結果よりは、むしろ悪い結果を招いているからです。まず第一に、あなたがたが教会で集まる際、お互いの間に仲間割れがあると聞いています。わたしもある程度そういうことがあるかと思えます。あなたがたの間で、だれが適格者かはっきりするためには、仲間争いも避けられないかもしれません。それでは、一緒に集まっても、主の晩餐を食べることにならないのです。なぜなら、食事のとき各自が勝手に自分の分を食べてしまい、空腹の者がいるかと思えば、酔っている者もいるという始末だからです。あなたがたには、飲んだり食べたりする家がないのですか。それとも、神の教会を見くびり、貧しい人々に恥をかかせようというのですか。わたしはあなたがたに何と言ったらよいのだろう。ほめることにしようか。この点については、ほめるわけにはいきません。わたしがあなたがたに伝えたことは、わたし自身、主から受けたものです。すなわち、主イエスは、引き渡される夜、パンを取り、感謝の祈りをささげてそれを裂き、「これは、あなたがたのためのわたしの体である。わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。また、食事の後で、杯も同じようにして、「この杯は、わたしの血によって立てられる新しい契約である。飲む度に、わたしの記念としてこのように行いなさい」と言われました。だから、あなたがたは、このパンを食べこの杯を飲むごとに、主が来られるときまで、主の死を告げ知らせるのです。従って、ふさわしくないままで主のパンを食べたり、その杯を飲んだりする者は、主の体と血に対して罪を犯すことになります。

5. エウカリスチア：ヨハネ福音記者の理解

ヨハネによる福音書 6章 51-57節：イエスは言われた。「わたしが与えるパンとは、世を生かすためのわたしの肉のことである。(略) はっきり言うておく。人の子の肉を食べ、その血を飲まなければ、あなたたちの内に命はない。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。生きておられる父がわたしをお遣わしになり、またわたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる。

ヨハネによる福音書 13章 1-17節：この世から父のもとへ移る御自分の時が来たことを悟り、世にいる弟子たちを愛して、この上なく愛し抜かれた。「あなたがたも互いに足を洗い合わなければならない。わたしがあなたがたにしたとおりに、あなたがたもするようにと、模範を示したのである。...このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである。」